

日本名詩集成



現代詩まで

等

日本名詩集成



近代詩から現代詩まで

# 日本名詩集成

江苏工业学院图书馆  
藏书章

學燈社

日本名詩集成

ISBN 4-312-00019-0 C 0092

1996年11月30日 初刷発行  
2000年9月10日 三刷発行

定価 **本体19000円** + 税

編者 天沢退二郎 野山嘉正  
大岡信 吉田勲生  
岡田隆彦 吉本隆明  
谷川俊太郎

発行者 肥田尚昭

発行所 株式会社 學 燈 社

〒169-8608 東京都新宿区西早稲田3-5-10

電話(03)5272-2055 振替00140-0-36253

本文組版印刷 大盛印刷株式会社  
写真製版 株式会社エニック  
表装類印刷 太陽印刷工業株式会社  
本文用紙抄造 日本製紙株式会社  
表紙用クロス ダイニック株式会社  
用紙類調達 明幸洋紙株式会社  
製本 有限会社 岩佐  
製函 有限会社加藤紙器製造所

◆編集委員

天沢退二郎  
大岡 信  
岡田隆彦  
谷川俊太郎  
野山嘉正  
吉田熙生  
吉本隆明

◆装幀

伊藤鑛治

岡田為恭筆  
「蓮花図」  
逸翁美術館蔵

## まえがき

新しい世紀に向けて、光あふれる豊かな詩の花束を贈る。

わが国の場合、詩の歴史はまだ若い。ひとくちに詩歌というが、詩歌とは古くは漢詩と和歌のことであった。江戸時代に至ってこれに俳諧が加わり、十九世紀の後半、明治という新時代の到来とともに近代詩が誕生した。それは西欧の詩に触発された新文芸として「新体詩」と呼ばれ、詩歌の中の新参者として、散文における「小説」とともに試行錯誤を繰り返さざるを得なかった。詩人が「遂に、新しき詩歌の時は来りぬ」（島崎藤村）と誇らかに宣言するまでには、明治に入ってから四十年近い時間が必要であった。これは古代の人々が漢詩をわがものとする努力を払ったことを連想させよう。

それから約百年、詩人たちは常に海外の新風と日本の文化伝統とのほさまに立ちながら、詩に固有の言葉の問題と、それに関わる時代と社会、そして人間の生の意味の問題を引き受けて闘ってきた。その道は決して平坦ではなく、坂道もあれば断崖もあったし、現在もなおあると言つてよい。たとえば文語定型詩から口語自由詩へ、民衆詩からレスプリ・ヌーボーへ、戦時下の詩から戦後詩へ、というような動きのどれ一つを取り上げてみても、そこには私たちの想像にあまる大きなうねりがあった。

しかし私たちは今、ここで、先人の豊かな遺業を所有し、またそれを引き継いで現在に生きる詩人たちの多様な営為と実りを眼の当たりにしている。それは二十一世紀を目前にした私たちが、日本の詩と詩人についてその個性を顧み、普遍性を認識し、新たな可能性を見いだす場所に立っていることを意味する。

すぐれた詩人は、鋭敏に時代を先取りする言葉の狩人である。彼は世人が常識とする言葉の秩序を破り、時には孤立を恐れず社会に反逆し、時には深く自己の内面に沈潜する。言葉の飛躍的な結合を辞さない詩人もいれば、さりげない表現の中に驚くべき発見を秘めている詩人もいる。詩人たちが提示する世界は多層的であつて、鋭い思想でもありうるし、繊細な姿かたちでもありうる。劇的な物語もあれば、万華鏡

のようなイメージの織物もあり、室内楽のようなアンサンブルの響きの表現も、入り組んだ知の迷宮もある。まことに詩という言葉の冒険は幅広く、奥行きも深い。

學燈社は今日まで半世紀近くの間、国語国文学・国語教育関係の出版に携わり、斯界に寄与してきた。さきに『日本名歌集成』を、また続いて『日本名句集成』を刊行して、日本の詩歌の歴史と現在を新しいアンソロジーとして世に問い、好評を得た。その姉妹編として今回の『日本名詩集成』を企画した意図は、詩史的観点と現在の視点から、明治より平成に至る近代詩・現代詩を精選し、かつ新鮮的確な鑑賞を付して読者の感受と理解に資することにある。本書の刊行が、さきの二編と併せて日本の詩歌の伝統と現在とを鳥瞰し、未来への展望を切り拓くに足る意欲的な出版であることは疑いをいれない。

私たち編集委員はこの野心的な冒険の計画に賛同し、協力を惜しまないこととした。ここに収めた二〇〇名あまりの詩人の七〇〇篇の詩と鑑賞は、編集委員七名の合議によって選ばれ、また八十六名の詩人・研究者の協力を得て、本書が長く生命を保つように努めた成果である。私たちは、本書が広く詩を愛する人々にとって、また国語教育に関わる人々にとって座右の書となり、さらに、これから詩に親しもうとする若い読者に恰好のきっかけを提供することを、心から期待している。

国際的な文化交流、異文化間交流は現在ますます盛んになってきている。詩歌の分野においても、伝統的な短詩である和歌（短歌）・俳諧（俳句）のみならず、世界の人々が日本の近代詩・現代詩にも関心を寄せつつある。私たちは、この『日本名詩集成』を新しい世紀の世界にも贈りたい。

一九九六年十一月

『日本名詩集成』編集委員一同

## 凡 例

### 本書の趣旨

◇本書は、明治初期より現代に至る日本の近代詩・現代詩の中から、代表的な詩七〇〇篇を精選収録し、その各篇に研究者・詩人など八十六名が鑑賞を加えることで、名詩とその的確な鑑賞を併せて広く読者に伝えることを図ったものである。

### 選詩の基準

◇詩史と近代詩・現代詩の成果とを博搜し、名篇・佳篇、人口に膾炙した詩、詩史的に意義のある詩または問題作と見なされる詩を、編集委員の検討合議によって選定した。なお、中学・高校の教科書に掲載されている詩も、教育的見地から広く知られている詩として、できる限り採り入れた。但し、収録した詩篇の数が、その詩人についての評価を左右するものではない。

### 配 列

◇近代詩の成立の事情に鑑み、冒頭に近代詩の萌芽とされる与謝蕪村の俳詩を置いた。

◇これに続いて詩人の活動年代によって、おおまかに「明治詩人」「大正詩人」「昭和詩人I」「昭和詩人II／昭和・平成詩人I」「昭和・平成詩人II」の五つのパートに分けて配列した。なお新体詩抄・唱歌・讚美歌・於母影を「明治詩人」の初めに置いて草創期の状態を浮かび上がらせることにとめた。

◇各パートの中の詩人の配列は、詩人の生年順とし、同一生年の場合は五十音順に従った。

◇作品の配列は、同一詩人の作品は、原則として所収詩集の発行順に従い、また同一詩集の中から複数の詩篇を掲載する場合は、各詩集の配列順とした。

### 掲出詩・底本・表記

◇どのような長詩であっても、抄出は行わず、全文を掲載した。

◇掲出詩は、原則としてその詩が初めて収められた詩人個人の詩集の単行本初版を底本とした。但し、個人詩集未収録の詩については、全集・選集あるいは初出雑誌などを底本とした場合がある。

◇底本に題名を欠く詩篇については、その冒頭の一句を（ ）に括って仮題として示した場合がある。なお、蕪村の作品は尾形仿・山下一海校注「蕪村全集」第四巻によった。

◇表記は、振り仮名を含めて底本どおりとした。但し、変体仮名は現在通行の仮名に、漢字は新字体にそれぞれ改め、刊行時の伏字や明らかな誤りは補填・訂正した。仮名遣いについては底本のままとし、詩人独自の当て字のよな表記は保存した。

### 鑑賞

◇その詩の表現の魅力、言葉の魅力のありかを直截にひきだす一方、必要に応じて成立の経緯や背景にも言及して、鑑賞・理解の一助になるよう配慮した。なおその際、研究や批評の最新の成果を織り込むことに意を用いた。

◇本書の性格に鑑み、叙述の方法や形式を事典風に統一することは避けた。

◇叙述にあたっては、原則として敬称・敬体は用いないこととした。

◇鑑賞文中、掲出詩の引用に際して、難読・誤読のおそれのある漢字に適宜振り仮名を付した場合がある。

◇執筆者名は一篇ごとに末尾に示した。

### 附 録

◇「収載詩人解説・索引」では、掲出詩の詩人すべてについて、簡潔な解説と、詩人名の掲出頁とを示した。詩人名の読み仮名の表記はすべて現代仮名遣いにより、配列は五十音順とした。なお新体詩抄・唱歌・讚美歌・於母影は末尾に掲げた。執筆者名は標題下に示した。

◇「掲出詩篇名索引」は、掲出詩の標題を五十音発音順に配列した。但し讚美歌については、歌詞の冒頭の一句をもって標題に代えた。

◇「掲出詩冒頭句索引」は五十音発音順に配列した。

執  
筆  
(五十音順)

大塚常樹	大岡 信	宇佐美 斉	岩成達也	伊藤真一郎	伊藤桂一	磯村英樹	井坂洋子	安藤靖彦	安藤元雄	荒川洋治	阿毛久芳	天沢退二郎	朝吹亮二	秋谷 豊
佐藤健一	佐々木幹郎	斎藤庸一	古俣裕介	小関和弘	高良留美子	栗原 敦	清岡卓行	木村幸雄	木島 始	川崎 洋	勝原晴希	角田敏郎	小野 隆	岡田隆彦
高橋順子	瀬尾育生	鈴木和成	鈴木志郎康	鈴木健司	杉本 優	杉本邦子	杉浦 静	新川和江	首藤基澄	清水哲男	嶋岡 晨	渋沢孝輔	沢 正宏	沢 豊彦
二木晴美	中村 稔	長野 隆	那珂太郎	中島国彦	戸塚隆子	傳馬義澄	坪井秀人	辻 征夫	辻井 喬	千葉宣一	田村圭司	谷川俊太郎	高橋睦郎	高橋世織
松浦寿輝	藤本寿彦	藤富保男	藤 一也	平林敏彦	平田俊子	平出 隆	平井照敏	平居 謙	飛高隆夫	早川雅之	長谷川龍生	野呂芳信	野山嘉正	野沢 啓
高橋智子	大塚美保	〔附録〕		和田義昭	吉本隆明	吉増剛造	吉野 弘	吉田文憲	吉田熙生	山田有策	森田実歳	牟礼慶子	宮崎真素美	三浦 仁



# 目次

◇掲出詩の題名は振り仮名を含め底本に拠っているが、目次限り難読・誤読のおそれのある漢字には現代仮名遣いで適宜振り仮名を付した。

# 明治詩人

## 与謝蕪村

北寿老仙をいたむ  
春風馬堤曲

三五 三五

## 新体詩抄

グレー氏墳上感懐の詩

拔刀隊

元 六

## 唱歌

蝶々

蛍

あふげば尊し

故郷の空

勇敢なる水兵

夏は来ぬ

三三 三三 三三 三三 三三 三三

## 讚美歌

## 於母影

第二十六 (くらきにねむる)

第四 (ゆふぐれしづかに)

第五十七 (もろびとこそりて)

三三 三三 三三

ミニヨンの歌

オフエリヤの歌

三三 三三

\*

## 森 鷗外

でつくのひる

沙羅の木

三三 三三

## 宮崎湖処子

忘れ水

三三

## 北村透谷

(露姫の梭歌)

双蝶のわかれ

三三 三三

## 国木田独歩

山林に自由存す

独坐

沖の小島

三三 三三 三三

## 土井晚翠

三三 三三 三三

星落秋風五丈原  
荒城の月

四三

島崎藤村

(序のうた)

草枕

四二

初恋

四一

鷺の歌

四〇

新潮

三九

千曲川旅情の歌

三八

吾胸の底のこゝには

三七

椰子の実

三六

岩野泡鳴

無言の石

三五

闇の盃盤

三四

与謝野鉄幹

敗荷

三三

GUTARA.

三二

誠之助の死

三一

上田 敏

落葉

三〇

山のあなた  
春の朝

二二

河井醉茗

ちぬの海

二一

塔影

二〇

稚子の夢

一九

春の詩集

一八

ゆづり葉

一七

児玉花外

馬上哀吟

一六

野口米次郎

歌の道

一五

経帷子

一四

山上の一本松

一三

船頭

一二

詩人

一一

松岡国男

野末の雲

一〇

都の塵

九

蒲原有明

牡蠣の殻

七

あだならまし

六

君も過ぎぬ

五

朝なり

四

海のさち

三

智慧の相者は我を見て

二

茉莉花

一

しめやかに雨は降る

〇

伊良子清白

漂泊

七

安乗の稚児

六

窪田空穂

根分

六

薄田泣菫

詩のなやみ

五

春夜

四

破甕の賦

三

公孫樹下にたちて

二

恋のわな

一

# 大正詩人

## 高村光太郎

根付の国	雑
——に	雑
道程	雑
秋の祈	雑
レモン哀歌	九
米久の晚餐	九
ぼろぼろな駝鳥	一〇
のつばの奴は黙つてゐる	一〇

## 与謝野晶子

ああ大和にしあらましかば	三
望郷の歌	四
をとめごころ	五
君死にたまふことなかれ	六
鼓いだけば	七

## 永井荷風

そぞろあるき	六
ぴあの	六
野口雨情	六
それは去年の昨日まで	六
哀別	七

## 山村暮鳥

岬	一〇
楽園	一〇
父上のおん手の詩	一〇
キリストに与へる詩	一一
春の河	一四
ある時	一四
こども	一五
野糞先生	一五

## 石川啄木

黒き箱	六
夏の街の恐怖	六
事ありげな春の夕暮	六
はてしなき議論の後	六
飛行機	七

## 北原白秋

邪宗門秘曲	一六
角を吹け	一六
序詩	一七
時は逝く	一八
糸車	一八
片恋	一九
野の晒	一九
白鷺	二〇

木下李太郎

金粉酒

両国

朝の新茶

曇り日の魯西亜更紗

築地の渡し並序

中 勘助

ほほじろの声

かもめ

貝殻追放

武者小路実篤

太陽と月

喜びは

仏陀の

萩原朔太郎

竹

春夜

艶めかしい墓場

遺伝

夜汽車

二〇

二二

二二

二三

二三

二三

二四

二四

二四

二五

二六

二六

二六

二七

二七

二八

二八

二九

三〇

旅上

荒寥地方

漂泊者の歌

大手拓次

河原の沙のなから

銀の足環

母韻の秋

林檎料理

春の日の女のゆび

川路柳虹

蒼蠅の歌

預言

夜

千家元麿

初めて小供を

白鳥の悲しみ

雁

秘密

蛇

小さい葬

母と憩ふ

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三四

三四

三五

三五

三六

三六

三七

三七

三六

三六

三九

三九

三九

三九

港にて

富士幸次郎

幸福

この残酷は何処から来る

夜語り

三木露風

接吻の後に

ふるさとの

雪の上の鐘

現身

水盤

三富朽葉

水のほとりに

のぞみ

室生犀星

はる

永遠にやつて来ない女性

小景異情

寺の庭

寂しき春

三三

三三

三三

三四

三四

三四

三五

三五

三六

三七

三六

三六

三六

三九

三九

三九

四〇

四〇

四一

室生犀星氏 一三  
 春の寺 一三  
 切なき思ひぞ知る 一三

佐藤惣之助

華やかな散歩 一四  
 漂流者の歌 一四  
 船乗りの母 一四  
 雪に書く 一四  
 島に就いて 一四

白鳥省吾

殺戮の殿堂 一七  
 美しい国 一七  
 峠 一八

日夏耿之介

双手は神の聖膝の上に 一五  
 非力は藪瀆なり 一五  
 海の市民 一五  
 道士月夜の旅 一五  
 黒衣聖母 一五

生田春月

幸福が遅く来たなら 一五  
 誤植 一五

尾崎喜八

もず 一五  
 夕べの泉 一五  
 朝の書齋へ 一五

西条八十

顔 一五  
 かなりや 一五  
 土偶 一五

佐藤春夫

或るとき人に与へて 一五  
 海辺の恋 一五  
 感傷肖像 一五  
 ためいき 一五  
 少年の日 一五  
 秋刀魚の歌 一五  
 或る人に 一五  
 望郷五月歌 一五

堀口大学

獅子宮 一六  
 踊る女 一六  
 詩法 一六  
 ミラボオ橋 一六  
 シヤボン玉 一六  
 砂の枕 一六  
 詩 一六  
 灰の水曜日 一六

高橋元吉

秋 一六  
 鳴く虫 一六  
 十五の少年 一六

福田正夫

夏まつり 一七  
 青ざめた田舎 一七  
 小作人 一七

百田宗治

何もない庭 一七  
 青空と宿命 一七  
 寂しき夕の歌 一七

竹内勝太郎

春の楽器

一四

紅鶴

一七

犁すき

一七

平戸廉吉

飛鳥

一七

触手

一七

大木惇夫

風・光・木の葉

一七

うそ寒いランプを点して

一七

宮沢賢治

春と修羅

一七

高原

一八

原はら体たい剣けん舞まい連れん

一八

永訣の朝

一八

二五 早春独白

一八

一〇八二〔あすこの田はね

一八

え〕

一八

早春

一八

眼にて云ふ

一五

村山槐多

二月

一六

君に

一七

壺井繁治

海

一七

星と枯草

一八

石

一八

蝶

一九

黙つてゐても

一九

八木重吉

冬

一九

踊

一九

素朴な琴

一九

(をんなには)

一九

(あかつちの)

一九

吉田一穂

母

一九

少年思慕調

一九

洪水前

一九

鴉を飼ふツアラトウストラ

一九

白鳥

一九

萩原恭次郎

愛は終了され

一九

ヲンナを讚美する

一九

父上の苦しみ給ひし事を苦

一九

しまむ

一九

離れてゆく秋

一九

断片 59

一九

岡本潤

罰当りは生きてゐる

一九

おれら

二〇

夜の機関車

二〇

富永太郎

橋の上の自画像

二〇

秋の悲歎

二〇

大脳は厨房である

二〇

## 昭和詩人 I

## 深尾須磨子

ダンテの鞭

ひとりお美しいお富士さん

三〇六

三〇六

## 田中冬二

青い夜道

ふるさとにて

もとすむら  
本栖村

フランシス・ジヤム氏に

氷

三〇八

三〇九

三〇九

三〇〇

三〇一

## 西脇順三郎

天気

旅人

旅人かへらず 一

旅人かへらず 一六八

近代の寓話

失われた時 IV

三三三

三三三

三三三

三三三

三三三

三三三

## 金子光晴

テンゲンジ物語

金亀子

燈台

街

落下傘

湖水

大腐爛頌

くらげの唄

偈

三二八

三一九

三二〇

三二一

三二二

三二三

三二四

三二六

三二七

## 安西冬衛

軍艦茉莉

春

河口

二つの河の間

車

三三七

三三六

三三九

三三九

三三〇

## 井伏鱒二

寒夜母を思ふ

緑蔭

## 笹沢美明

櫂が十本

おるがん調

おるがん調

## 蔵原伸二郎

きつね

西瓜畑

鴉

## 丸山薫

砲壘

病める庭園

幼年

三三〇

三三一

三三三

三三三

三三三

三三四

三三五

三三五

三三六

三三六

三三七



朝鮮	三六	鯛の復活	二六三
帆船の子	三九	村野四郎	二六三
岡崎清一郎		体操	二六三
貧乏の詩	三九	冬深む	二六四
落日について	四〇	枯草のなかで	二六四
白薔薇館	四一	抽象の城	二六五
地路歷程	四三	空地の群落	二六六
秋	四三	北園克衛	
尾形亀之助		記号説	二六六
螻蛄 <small>おけら</small> が這入 <small>はい</small> つて来た	四四	夏	二六八
商 <small>あきない</small> に就いての答	四四	黒い肖像	二六九
詩人の骨	四五	嵯峨信之	
北川冬彦		湖	二七〇
豚	四六	ヒロシマ神話	二七〇
戦争	四六	* (歩いてても歩いても)	二七一
壊滅の鉄道	四七	中野重治	
馬	四八	しらなみ	二七一
馬と風景	四八	わかれ	二七三
三好達治		垣根にそうて	二七三
乳母車	四九	夜明け前のさよなら	二七三
		生	二六三
		大手	二六二
		益々青くなれよ	二六二
		一九一一年集 49	二六〇
		高橋新吉	
		風の中へ歌をおくる	二六〇
		馬車の出発の歌	二五九
		ふくらふ	二五八
		なぜ歌ひださないのか	二五七
		ゴオルドラツシユ	二五五
		小熊秀雄	
		母の坐像	二五五
		候鳥 <small>こうちよす</small> 通過	二五四
		石川善助	
		涙	二五四
		大阿蘇	二五三
		郷愁	二五三
		燕	二五二
		鴉	二五〇
		雪 <small>ゆき</small> のうへ	二五〇